

## シンポジウム・研究会報告

第7回若手研究者支援プログラム  
「古事記と萬葉集」

2011年8月21日～23日

第7回若手研究者支援プログラムを2011年8月21日から23日の3日間にわたり開催しました。これには奈良県立万葉文化館万葉古代学研究所が共催として加わり、また22日の若手研究発表会には萬葉語学文学研究会も共催として加わりました。特に今回は22日に古代史学・歴史地理学の専門家による臨地研究プレ講義の時間を設け、23日にはそれを踏まえつつ臨地説明が行われたことでより充実したプログラムになりました。学内外の研究者を中心に、古事記撰進1300年記念事業を準備されている奈良県職員の方々も交え、多数の参加を得ました。

8月21日(日) 於・奈良県立万葉文化館  
公開講演会とシンポジウム「古事記と萬葉集」

「声のことば、文字のことば」

奥村悦三(奈良女子大学)

「古事記本文中の仮名と萬葉集訓字主体表記歌巻の仮名」

乾善彦(関西大学)

「古事記・日本書紀の冒頭」

榎本福寿(佛教大学)

「古事記の訓みー方法と立場ー」

内田賢徳(京都大学大学院)

コメンテーター : 館野和己(奈良女子大学)

コーディネーター: 奥村和美(奈良女子大学)

奥村(悦)氏は、稗田阿礼の原古事記の誦習の過程に、文字化されたものの訓読の契機を探り、乾氏は、訓の環境の中での仮名の使用について、古事記本文中と萬葉集訓字主体表記歌巻とを比較しつつ考察されました。また榎本氏は、古事記と日本書紀の冒頭に、「尊卑先後之序」を軸にした神話世界を構



開会の挨拶をする寺川真知夫・万葉古代学研究所所長

築する意図を読み取られました。最後に内田氏は、山口佳紀氏との相互批判を通して、古事記読解の方法と立場の違いを明らかにされました。これらの講演をうけてシンポジウムでは、まず館野コメンテーターから、古事記と木簡に見える国名表記について最新のデータに基づく報告があり、講演者とともに活発な討論が行われました。一般の方を含め、学内外の研究者ら約120名が参加。

## 8月22日(月) 於・奈良女子大学

## 臨地研究プレ講義「古事記・萬葉集の故地」

館野和己・出田和久(奈良女子大学)

今回初めて、翌日の臨地研究に先立って事前の講義の時間を設けました。古代史学・歴史地理学それぞれの立場からの詳しい説明を受けました。臨地研究参加者を中心に40名が参加。

## 若手研究発表会

『古事記』における倭建命の位置づけー須佐之男命との比較ー

岡田高志(大阪市立大学大学院前期博士課程)

「萬葉集巻六の配列について」 根来麻子(大谷大学)

「古事記「廻」字考」 阪口由佳(奈良女子大学)

萬葉語学文学研究会との共催で、若手研究者による研究発表のあと、それぞれ質疑応答が行われまし

た。古事記の神話学的読解、本文の訓詁、或いは萬葉集の歌の配列と編纂の意図について発表がなされました。研究者を中心に50名が参加。

8月23日(火)

### 臨地研究「古事記・萬葉集の故地」

コース：太安万侶墓～春日宮天皇陵～都祁の氷室～石上神宮～行燈山古墳～多坐弥志理都比古神社～売太神社

臨地説明：出田和久(奈良女子大学)

古事記・萬葉集に関わる人物の陵墓や神社等をバスでめぐり、前日の臨地研究プレ講義での講義内容を踏まえながら見学しました。若手研究者を中心に24名が参加。(奥村和美)



売太神社(大和郡山市稗田)にて

### 都城制研究集会シンポジウム 「都城の廃絶とその後」

2011年2月12日

本センターの重要な研究課題に、古代都城制の実態を東アジア的視野の中で解明するということがあります。そこでCOEプログラムの時以来、毎年、都城制研究集会を開いています。2010年度は2011年2月12日(土)に、「都城の廃絶とその後」をテーマにシンポジウムを行いました。遷都が行われた後、前の都はどのような位置づけを与えられ、どのように変化したのか、ということ、文献史料と発掘調査の成果、それに万葉歌を通して考えてみました。具体的報告内容は下記の通りですが、多くの都では遷都実施後暫くの間は、新しい施設に変化することなく、特殊な場所として位置づけられ、保持されていたことが明らかになりました。参加者は100名を超え、関心の高さがうかがえました。

(館野和己)

「宮都の廃都とその後」 館野和己(奈良女子大学)  
「飛鳥宮の廃絶」 鈴木一議(奈良県立橿原考古学研究所)  
「平城遷都後の藤原宮・京」 林部均(国立歴史民俗博物館)  
「難波宮・京の廃絶とその後」 積山洋(大阪歴史博物館)  
「廃都後の平城宮」 山本 崇(奈良文化財研究所)  
「平安時代の長岡宮・京」 中島信親(向日市文化資料館)  
『万葉集』に詠まれた古都 奥村和美(奈良女子大学)  
共催：都城制研究会(「大阪上町台地の総合的研究—東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型—」研究代表：脇田修)



各報告を受けたシンポジウムでの討論

### 古代学学術研究センター研究会

古代を見なおす2(2011年1月25日)

「上古の時空」 西谷地晴美(奈良女子大学)

人はこれまで、どのように時間をとらえてきたのでしょうか。報告では、上古という概念をめぐって『読史余論』や『神皇正統記』、『古事記』・『日本書紀』などの史書に分析が加えられ、その概念の成立が中国古代の知を自らの歴史に組み込む行為と表裏をなしていること、いかにすれば規範とする時間が空間的には日本を超えて求められたことが論じられました。

討論においては、そうした時間、歴史意識において、神代はどのように位置づけられるのかが、おもな論点となりました。また、空間が分割され閉鎖性をもつものに対して、時間は公開性を有するとし、そうした誰も所有しえないものの存在から社会関係を問なおす必要があるとの提言に、時間そのものの理解についても問いが出されました。(西村さとみ)

平城京に住む人びと(2011年3月25日)

「8世紀の京戸・京貫と京職の職務」

穴戸 香美(奈良女子大学大学院)

「僧綱の管理行政—その管轄範囲を中心に—」

中川 由莉 (奈良女子大学大学院)

平城京とはいかなる場であったのかを、そこに住む人びと、とりわけ彼らを管理する行政のありようから考えるという趣旨のもと、2本の報告がおこなわれました。

穴戸報告においては、京戸は特別な存在であり、その戸籍の移動は9世紀までほとんど実施されなかったとする見解が広くみられるのに対し、京貫・除帳の事例や、令文および浮浪・逃亡に関する法令の検討から、京の戸籍の扱いは、8世紀には基本的に諸国と同様であった可能性が指摘されました。その指摘がもたらす京戸のイメージの変化、そうした京戸のありようが生みだされる要因など、討論は京戸の位置づけ、さらには京という場の性格をめぐって展開されました。

その平城京には寺院が建ちならび、僧尼たちも住まっていました。それらの管理機関とされる僧綱に着目したのが中川報告です。ここでは、令規定や正倉院文書の考察から僧綱の職務内容が復元され、僧尼の名籍管理が重要な職務として抽出されました。ただ、その管轄範囲は京内とみられるのに対し、職務によっては京外の寺院、僧尼にまで僧綱が関与していました。この点をふまえて僧綱の機能、そして京という場の性格を考える必要があることも論じられました。僧自身が職務に携わる僧綱として僧尼の管理機関が設置された理由が問われ、そこから国家統治における仏教の機能へと議論が進みました。

(西村)

〈みやこ〉観の変遷 (2011年6月20日)

〈みやこ〉をめぐる言説の検討—話題提供—

西村さとみ (文学部人文社会学科)

平城遷都から1300年にあたる昨年、古代学術研究センターでは〈遷都〉を緒に、都市・都城について考えてきました。その過程で、福原遷都を、平安京以前の遷都の論理を援用して語るのではなく、当該期の人びとの〈みやこ〉をめぐる観念をふまえて位置づけなおさなければならない、との問題提起がなされましたが、それを受けとめ、議論を深めるにはいたりませんでした。

そこで、今年度も引き続きその課題に取り組むこととなり、まずは福原遷都期の〈みやこ〉をめぐる言説を、変容の過程において読み解く場が設けられました。そして、神々に守護された〈みやこ〉、王の命運をあらわす空間としての〈みやこ〉の観念が、

どのようにして形成されてきたのか、またその観念と福原遷都、平安京への還都はいかなる関係にあるのかについて議論が交わされました。(西村)

遷都から見る日本史 (2011年8月29日)

福原遷都と「帝都」観の変容

森由紀恵 (日本学術振興会特別研究員)

昨年度の研究会において福原遷都論の課題を提起された報告者は、今回、当該期の日記に平安京および福原がどう称され、またそれらについて何が語られているかを検討されました。そして、時の右大臣九条兼実の日記『玉葉』に「帝都」という語が遷都との関連で一時的にあらわれ、消えてゆくという事実、そこに神明のはたらきが語られるという事実に着目され、それらが中世の国土観を論じる際にしばしば引用される『溪嵐拾葉集』につながっていくであろうことを論じられました。

討論では、なぜ、どのような意味を込めて「帝都」という語が用いられたのか、そこにみられる観念が、遷都を推進する側、反対する側の政治構想とどうかかわっているのか、といった点をめぐって、活発な意見が飛び交いました。(西村)

国際研究会

「みやこを見直す」

2011年5月28日

「平城京における京貫の実態と京職の職務」

穴戸 香美 (奈良女子大学大学院)

「奈良時代における僧綱の管理行政—管轄範囲をめぐって—」

中川 由莉 (奈良女子大学大学院)

「最近発掘された百済の寺院について」

李 炳 鎬 (韓国・国立中央博物館)

通訳: 井上 直樹 (京都府立大学)

古代都城制を研究テーマの1つとしている本センターでは、古代都城の実態解明の一環として、京の住民と寺院の問題を取り上げて、国際的に検討することとしました。そのため、大学院生の穴戸さんと中川さんに加え、檀原考古学研究所で研修中の李炳鎬 (イ・ビョンホ) 学芸研究官をお迎えして、国際研究会を開きました。

穴戸報告は平城京における京貫と除帳について、中川報告は奈良時代の僧綱の管轄範囲について、いずれも上記3月の研究会での報告を発展させたものでした。

李報告は、百濟最後の都・泗泚のあった扶余の定林寺・王興寺、益山の弥勒寺跡などの百濟寺院遺跡の発掘調査を踏まえ、定林寺式伽藍配置という概念を設定されました。中門―塔―金堂が一直線に並び、それらを回廊が取り囲み、金堂北の講堂の東西で、東西回廊は東西附属建物（東堂・西堂）につながるという配置です。そしてこの伽藍配置が、泗泚時期の寺院の一次的なモデルになったとされました。また弥勒寺の三院並列式伽藍配置は、これを三つ並置させたものであり、飛鳥寺の三金堂もその流れの中で現れたものと主張されました。多くの百濟寺院の伽藍配置について再検討を加えた、意欲的な報告でした。

倭と関係が深かった百濟における寺院のあり方は、日本の古代仏教・寺院や都城を研究する上でも、注目すべきものであり、飛鳥寺は本当に金堂が3棟あったと理解してよいのかなど、活発な討論が繰り広げられました。（館野）

## 調査報告

### 西安および洛陽の都城関連遺跡

出田和久（文学部人文社会学科）

かつての唐の都長安は、黄河の支流である渭河が形成した肥沃な黄土の沖積平野、いわゆる関中平野のほぼ中央部に位置する。今回の調査は、古代日本における都城の形態上の特色や性格を考えるうえで必須とされる隋唐長安城及び北魏洛陽の都城調査に関する最新情報の収集、および発掘調査や大明宮跡の遺跡整備の現況視察を主目的とした。期間は2011年3月26日から31日、調査は館野和己、奥村和美および筆者（以上、奈良女子大学）の3名で行った。以下に簡単に報告することとしたい。



写真1 大明宮国家遺址公園南半部  
写真中央が丹鳳門、含元殿の基壇上から撮影

現在の陝西省西安市は周知のように唐の都長安の故地である。市街地の大部分がかつての長安城と重なるが、必ずしも京都のように都城の街路がそのまま踏襲されて残っているわけではない。唐長安城は1957年以来、中国社会科学院考古研究所によって発掘調査が行われ、唐の長安城における里坊制都城の実態が明らかにされてきた。主要な遺跡を取り上げ、現況について述べていこう。

**大明宮国家遺址公園** 当初、唐の皇城は長安城の北辺中央に位置したが、早くも第2代皇帝の太宗、3代高宗の時に城外の北東に大明宮が造営された。現在、その跡は「大明宮国家遺址公園」として整備されている（2010年10月1日、国慶節に合わせてオープン。面積は約3.5km<sup>2</sup>、平城宮跡の約3倍）。

大明宮の保存事業は1995年から開始され、奈良文化財研究所との共同調査も実施された。現在、大明宮の正殿である含元殿は基壇が復原整備されている。主殿の前には幅78mの階段があり、その両側に竜尾道がとりついている。また、紫宸殿や宣政殿、望仙台の基壇、さらに太液池や蓬莱山も整備復原されている。出土品の展示施設として、2003年、含元殿の北側に保管所陳列館が開館し、現在はその北側に大明宮遺址博物館が新たに建設されている。このほか大明宮の南門である丹鳳門が復原され、内部には門跡の遺構が展示されている。丹鳳門は公園の入口ともなっている（写真1）。丹鳳門から含元殿前面までの公園南半は無料で公開されているが、含元殿より北は入園料（60元）が必要である。

含元殿の基壇が整備されつつあった7年前と比べ、丹鳳門の復原など史跡公園化の急激な進展に驚かされた。これは、西安市の南東、曲江池の北側に建設された、唐代を再現した一大テーマパーク「大唐芙蓉園」（2005年4月開園、面積約67ha、入園料68元）の成功に刺激されたところが大きい。今後さらに、宮城の城壁も復原するという話であった。

**曲江池周辺** かつて訪れた時には郊外の荒涼とした池跡でしかなかったが、現在は池が復原され曲江池遺址公園となっている。訪れてみると、公園は無料で開放され、市民の行楽地になっていた。様々な売店も出て大変な賑わいであった（写真2）。池中央のくびれ部には大きな岩が連ねられ、対岸に渡ることもでき、大勢の人たちが行き交うのが遠望できた。しかし、どの程度調査がなされ、どの程度調査



写真2 曲江池遺址公園

成果に基づいた復原なのか判然としなかった。

公園の北西に隣接して先述の大唐芙蓉園があり、周辺は中・高層住宅が林立し、高級住宅が建ち並ぶ住宅街となっていた。

**北魏洛陽城** 北魏洛陽城の調査は今回の調査の中心であり、現在の洛陽市の東北東 20km 弱、いわゆる「中原の地」にあり、高名な白馬寺の東方約 2km に位置する。都城は内城と外城に分かれ、外城には街区形態が正方形となるように条坊街路が存在したとされる。早くから岸俊男氏が指摘したように日本、ひいては東アジアの都城の形態を考える上で重要な位置を占める遺跡である。今回、中国社会科学院考古研究所の劉濤助理研究員の案内を受け、現況を視察した。なお、洛陽市は従来アクセスが良いとは言えなかったが、2010 年に西安と鄭州を結ぶ中国新幹線が開通し、西安から 2 時間ほどで行くことができるようになっている。

まず宮城を訪れた。遺構は内城の東西の城壁がよく残り、宮城正門の閭闔門、その内側の 2 号宮門、さらに太極殿の基壇なども残る。太極殿は宮城域の東西中心線上ではなくやや西寄りに位置する。太極殿の中軸線上に閭闔門があり、そこから平城京の朱



写真3 史跡公開に向け整備中の銅駝大街の遺構  
(公開予定は撮影日の 3 日後とのことであった)

雀大路に相当する銅駝大街が南に伸びる。銅駝大街は幅約 40 m であり、長さ 6 m 分が遺存していたとのことであった。

『周礼』によれば一般に「宮城十二門」である。だが北魏洛陽城は、発掘調査により内城の北壁、東壁は、『洛陽伽藍記』にもみえる通りそれぞれ 2 門、3 門である一方、西壁は同書の記述より 1 門多い 5 門であることが判明した。そのため宮城構造も実際には変則的であったと予想される。門道についてみても閭闔門や 2 号宮門のそれは 3 本しかなく、「一門五道」に合致しないことが明らかとなっている。

調査当時、この宮城跡が史跡公園として 3 日後の 4 月 1 日に公開される計画であるとのことで、閭闔門や 2 号宮門の基壇や銅駝大街の復原整備が進められていた (写真 3)。

次いで城壁についてみると、内城壁は北東角の残りがよく、基底部の幅約 14m、高さ 5 ~ 6m の城壁が長さ約 950m にわたって残存している (写真 4)。断面が見られる部分では、版築のあとが鮮明に観察された。城壁に上ると、北に北魏の皇帝陵をはじめ貴族達の墳墓の地である邙山を望むことができる。その一方で、外城壁は白馬寺の西側や邙山などで断片的に確認されているものの、内城壁に比べて残りがよくない。筆者らの調査中も、車窓からは外城壁に沿う濠跡らしきものを眼にしたのみで、目視で分かる外城壁に行き当たらなかった。

このほか北魏永寧寺跡、隋唐洛陽城の応天門の発掘現場および定鼎門の遺構などを見学した。北魏永寧寺は中国古代寺院のプランを考える上で重要な寺院で、高さ 100m 以上の九重の大塔があったと『洛陽伽藍記』に見える。銅駝大街の西側に位置するが、寺院は廃絶し、現在は塔基壇を残すのみである。

一連の調査を終えて、西安でも洛陽でも遺跡の整備が急速に進められていることを実感した。しかし、



写真4 内城城壁の北東角の部分  
(背後に邙山を望む)

西安では市域やその周辺の開発・建設事業の進展によって市街地が拡大したこともあり、土地改変が著しい。そのため失われた遺跡も多い。性急な調査、視覚性を追求する復原のありようは、遺跡・遺構の保護との関連で問題をはらんでいよう。

## 古代史・環境史プロテオミクス研究 創成事業との連携

### 共催シンポジウム

#### 夾紵・乾漆 (2011年1月22日)

平成21年12月12日の「夾紵・乾漆」シンポジウムでは、(1)「乾漆」は明治時代以後の新しいタームであり、実態を反映し歴史もある「夾紵」のほうがふさわしい名称であること、(2)牽牛子塚古墳出土「夾紵棺」には絹が用いられていることの2点を明らかにしました。今回のシンポジウムでは、その後の「牽牛子塚古墳」研究の進展、最新の科学機器を用いた「絹」の分析について報告しました。

#### 第1部

「奈良女子大学所蔵牽牛子塚古墳出土夾紵棺について」

宮路淳子 (奈良女子大学)

「牽牛子塚古墳出土夾紵棺断片中の絹」

河原一樹 (奈良女子大学)

#### 第2部

阿修羅像を代表とする興福寺の八部衆、さらに十大弟子像は唐代に盛行した夾紵技法を今に伝える重要資料です。天平夾紵仏像の断片2点を材料に、科学分析と復元摸造から天平技術技法に迫りました。

「天平夾紵仏像断片の顕微鏡観察」

岡田文男 (京都造形芸術大学)

「標準的夾紵技法による復元摸造」

矢野健一郎 (仏師・東京藝術大学)

「楡(にれ)を用いた夾紵技法による復元摸造」

山崎隆之 (愛知県立芸術大学名誉教授)

(宮路淳子)

#### 墨と膠 (2011年5月21日)

墨の製造や文化財の修復に不可欠の接着剤である膠。膠を使用し、製造の経験を有する2つの研究所の報告と、最新の科学分析を通して膠について考えました。

「宋墨の謎に迫る一新出土資料から」

松尾良樹 (奈良女子大学)

「膠のコラーゲンから読み取る科学文化社会情報」

中澤隆 (奈良女子大学)

「元興寺文化財研究所と膠」

植田直見 (元興寺文化財研究所)

「川面美術研究所と膠」 多田牧央 (川面美術研究所)

(宮路)

#### 古代の絹 (2011年11月12日)

遺跡から出土する絹資料の最新の科学分析を通して古代の絹について議論しました。

「奈良県桜井市出土の絹資料について」

松宮昌樹 (桜井市教育委員会)

「古代の絹の質量分析」 中澤隆 (奈良女子大学)

「考古資料にみる古代の絹」

岡田文男 (京都造形芸術大学)

「絹蛋白質の物理化学的基礎」

小林祐次 (大阪薬科大学)

(宮路)

## 地域貢献に関わる活動

### 「文化財レスキュー応援せんと！」募金報告

2011年3月11日に発生した東日本大震災平では、多くの尊い命が失われました。心から哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。

この震災では貴重な文化財も多く被災しました。奈良女子大学では文化財レスキュー事業を支援する「文化財レスキュー応援せんと！」実行委員会に参加しています。同実行委は奈良文化財研究所・奈良国立博物館・元興寺文化財研究所・奈良教育大学など、県下の諸機関から構成され、募金活動などの支援事業を行っています。これに伴い、本センター主催の研究会をはじめとして、関連のシンポジウムなどの場において募金活動を行いました。

ここにその結果をご報告いたしますとともに、ご協力下さいました皆様に御礼申し上げます。今後も変わらぬご支援のほど、よろしく願いいたします。

**募金総額：15,612円**

#### 募金活動を行った研究会・シンポジウム：

- ・第7回若手研究者支援プログラム (2011年8月21～22日 於・奈良県立万葉文化館・奈良女子大学)
- ・古代学学術研究センター研究会「古代のみやこを考える」(2011年11月26日 於・奈良女子大学)
- ・古代学学術研究センター月例研究会 第12回～第14回 (2011年10月5日、11月9日、12月7日 於・奈良女子大学)
- ・国立大学協会共催シンポジウム「古都奈良の都市防

- 災」(2011年10月22日 於・奈良女子大学)  
 ・奈良女子大学史学会大会(2011年11月23日 於・奈良女子大学) 以上

奈良県・周遊キャンペーン  
 【大和浪漫回廊】への監修協力

【大和浪漫回廊】は奈良県中和地域を対象とする周遊キャンペーンです。第2弾となる2011年度は奈良県桜井土木事務所が中心となり、「巨大古墳ミステリー」「恋する大和路」の2つのテーマを軸にして、巨大古墳や万葉歌碑、史跡、寺社へと旅行者を誘います。

本センターは第1回に引き続き、監修協力や歌碑の解説作成などで協力しています。

期間:2011年10月15日(土)～2012年3月15日(土)  
 ホームページ: <http://yamato-romankairo2.com/index.html>

研究成果の発表・公開

刊行物案内

本センターの研究紀要『古代学 第3号』と、2009年度の都城制研究集会の内容を伝える『都城制研究(5)』が、2011年3月に刊行されました。それぞれの内容は以下のとおりです。

**古代学3**「日本の古代都市における儀式空間についての予察的研究—漢字文化圏の南郊壇、社稷壇、大廟の事例研究—」上野邦一／「貝殻タンパク質の化学と考古学・古代学の接点」中沢隆・鴻池亜弥・丸山浩樹・西村紀・松尾良樹／「万葉歌にみる恭仁京と神護寺のトボス」伊藤太／「歌から、歌へ—表記史、表現史のなかで「歌木簡」を考える—」奥村悦三／<シンポジウム「歴代遷宮と古墳の思想」>／「歴代遷宮の理由とその克服」館野和己／「歴代遷宮と稲荷山鉄剣銘」岩井敏明／「首都変遷の原理」小路田泰直／『歴代古墨簿』—「古梅園造墨資料」翻訳と解題(1) 松尾良樹・的場美帆

**都城制研究5**「平城京の小規模宅地」原田憲二郎／「難波京の条坊区画」積山洋／「長岡京の小規模宅地」小田桐淳／「平安京の小規模宅地」南孝雄／「文献史料から見た平城京の小規模宅地と坪付呼称」館野和己／「文献史料から見た長岡京・平安京と町・戸主」西山良平

センターから

着任のご挨拶

特任助教 宮崎良美



2011年4月1日から古代学  
 学術研究センターの特任助教と  
 して勤務しています。

私は本学で人文地理学を専攻し、大学院を単位取得退学した後、マーケティングなどの仕事に携わっていましたが、ご縁があって、2008年、本学21世紀COEプログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」において、研究支援推進員として「奈良盆地歴史地理データベース」の構築の実務を担当することになりました。2009年以降は古代学学術研究センターで同データベースの拡充と、地域貢献としての活用・公開に関する業務を行っています。また、GISを用いた景観復原や絵図・古地図の分析にも興味を持つようになり、研究にも着手しています。

「奈良盆地歴史地理データベース」は景観復原的研究のためのGISデータベースです。歴史系の分野へのGISの導入は比較的新しいのですが、着実に研究事例が増えています。これを受けて、新たな地域像・歴史像の提案や、魅力ある研究成果の蓄積・公開などが歴史系GIS研究の新たな課題となっています。「奈良盆地歴史地理データベース」は奈良盆地の古代に関するあらゆる情報を集積し、公開に際してはGoogleMapやFLASHの技術を用いることで、GIS専用のソフトウェアを必要とせず、インターネットブラウザで閲覧できることも魅力であり、先に挙げた課題に対する提案のひとつだと言えます。

このデータベースに関する業務には古代日本史に関する知識が欠かせません。気分一新、関連分野の知識を吸収していきたいと思えます。至らない点も多くありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

奈良女子大学古代学学術研究センター

Newsletter No. 3

2012年1月12日発行

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 205号室

TEL/FAX: 0742-20-3779

URL: <http://www.nara-wu.ac.jp/kodai/index.html>

e-mail: [kodaigaku@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:kodaigaku@cc.nara-wu.ac.jp)

編集: 宮路淳子・宮崎良美